

# 転換期における一文人像

——柳北の場合——

齋 藤 清 衛

成島柳北は、天保八年二月、江戸浅草に生まれ、明治十七年十一月、享年四十八歳で死去した。明治元年はかれの三十二歳の年であつたが、維新革命といふほとんど史上未曾有の荒浪の中を、その三十歳時代の間に経験した事情からみても、その一生は明治維新の世相の象徴であつた。さらに柳北は、二十歳時代、少時から精究していた漢学を以て、時の將軍、徳川家定や家茂（もち）やの侍講とさえなつて居り、維新以後は外國奉行、会計副総裁やに任官したが、明治五年にはかの本願寺法主現如上人に隨行して歐米を回遊し、同時にその通弁の役をも果している。その履歴は、かように、変転極まりがなかつたが、当時の政治家として最も信頼された木戸孝允が、かれに官界に入ることもあつたけれど、「閑散ニ糊口ヲ計ル方可然」との考から、終生を新聞人（朝野新聞）や、文学雑誌編輯者（花月新説）というジャーナリストの道を選んで終つたのであつた。

全生涯を一文人として生きぬくような人物には、その経歷にある種のタイプの出来てゐる事は免れぬところである。柳北の場合は、少年時代から短歌をよみ、八歳の年（弘化元年）すでに自歌集一冊を編んでいる。おそらく周囲からも神童呼ぱりをうけていたものに相違ない。父の成島稼堂は幕府の図書頭となり、「後鑑」三百七十五巻を編纂したこともあるが、柳北はその亡父の遺著をうけて、後鑑増訂の業を完成し、幕府から特に賞与を賜つてゐる（二十四歳）。さらに、時代の方向を透視する慧眼は、漢詩文の才のみで満足ができず、二十六七歳の頃から、英語を独習し、英國文学にさえ興味を持ち初めてゐる。その成果が明治五年から六年にかけての外遊となり、帰朝するや本願寺に翻訳局設置など斬進な計劃立てることともなつたのであつた。

そこでかれが政治界に入ることを断念した主因は何かと云えば、第一に維新後の新内閣における種々の汚職や腐敗的な

事実であつた。政界の裏面を知らぬものにとつて、政治も一つの魅力となつたであろうが、すでに西南役の勃発する前兆は、柳北の耳にも、種々のルートを通して潜み入つたである。ことさら李杜のような唐詩人の生涯を憧憬しなかつたにせよ、自然の美を探して、悠々と旅泊の間に朝夕を送るとか、心友と会合して心のままに吟咏して春秋をすごすという生活の方に氣を引かれたのである。この種の隠逸趣味、自己凝視の自主的態度は、多かれ少なかれ、古來の文人歌人を通じて見られる一つの共通癖となつてゐるものであつた。

およそ、天稟的に、性格上の意思がつよく、行動につき入る傾向のものは、乱世の時代や、転換期の世に生れあわせても、消極的な厭世觀に捉われることなく、時代の荒浪の中に突進する。古來の政治家や英雄肌の人物の大半はこの部類に属している。しかし、かれの求めるところは多く権謀と術数であるから、その一生は勝つか負けるか、名を立てるか奪われるかに係わつてゐる。この事実は、人として、対象への凝視、物への静観を重んずる以上、必ずしも選びがたいところである。柳北は、素質的に実踐力を持ち、例えは慶応三年には、騎兵頭並から抜擢されて騎兵奉行に昇進している。かよううに武人としてさえも立ちうる半面を持ちながら、同年の冬には潔く退職し、いよいよ徳川幕府の瓦解をきくや、隅田川の堤防近く(秋葉神社側)、小屋を造つて隠者の生活に入つてゐる。すでに文久元年、自邸を「有待舎」と名づけ、風雅人め

いた氣位のほどを見せたこともあるが、ついで世を諷刺した詩によつて閑居を強いるなど、まったく古代の文人型に出来ている。これは、意思的で粘りづよい性格とはむしろ矛盾するものであるが、かれの明敏な理性が、かくかくであるとの結論を見出だすと、そのためのごまかしが出来ない性格である。それを友人仲間に向つても語りきかすであろうが、詩文としても表現せざるを得ないのが、また、彼らしい文人の運命であつた。

ただしこの点について、今日と明治初期との相異は、公表機関の有無の別であつて、安政六年に「柳橋新誌」初篇を編んでゐるのは、なお風流の遊びにすぎなかつた程度のものにせよ、明治二年に、東京を立つて山陽方面まで旅をした紀行「航瀬日記」、明治五年歐米回遊の紀行「航西日乘」やが、ほとんど十カ年近くも書斎の箱の底に潜められ、活字となつてある。ひとり柳北だけでなく、一般的文人詩人が、そうした社会の状勢に自らの心を悩ましていたかがわかる。

柳北が欧米旅行に出発した明治五年には、日々新聞が創刊され、また新字制の発布なども行われてゐる。その翌々年に朝野新聞の発展と共に、三十八歳の柳北はその新聞社長となり、末広鉄腸等と新聞編輯に様々な創意を示したが、明治九年には時の文相に詰問した文章の筆禍から、一時入獄の刑罰に処せられている。論説のため筆禍をうけたものは、かれだ

けではないが、公表を敢行する意志的態度にはかれの特色を

つたろう。

語るものがある。紅燈の巷に却つて社会の浮臭を忘れようとすることは、江戸時代の頬山陽のような高士の行状の間にも見られたものであるが、もともと文人癖を持つた柳北は、朝

野新聞の中に、特に詩文欄を作り、ひろく読者の投稿を掲載した。また同時に、「柳橋新誌」第二篇を作つたが、その三

篇は、紅燈流儀の風俗瓊瑠の理由で発禁を受けた。いわば、

漢詩は漢詩にしても、因習的な花や月の美を吟咏するだけでは満足が出来ず、自ら、排律の詩形式を選び、特に「長古」

風の詩に準ずるもの多かつた。これは混沌期の人事をそのまま題材とし、遊里の淫蕩をも自由に歌おうとするところに遺された唯一のスタイルであつたとも云えよう。それすらも、

「雁」(鷗外)の主人公が「新らしい世間の出来事を詩文に書いたのを面白がつて読む」と述べているように、若い階級には、他には比べもなく、読書の欣びとなつていたのである。柳北が、歐州航路の途中に、「書懐」と題する次のような作がある。

半生志業一難成

怒氣如兵夜有声

黒海風濤紅海月

扁舟何日載吾行

かかる小詩片にも日本漢詩史の中に一つのポイントが捺されている。多数の読者もこれに追随していくわけであるが、明治十年、柳北が主筆として、いよいよ「花月新誌」創刊を決するに到つたのは、またかかる世相の集積によるものであ

る。明治十年は、いうまでもなく、西南役勃発の年であり、柳北は隠士めいて「柳北奇文」などを執筆しているが、なお漢詩に対する興味において、特に「大槻磐溪、大沼枕山、森春

濤、小野湖山等多数の知友と通ずるものがあつた。花月新誌の編輯は、漢詩漢文を主眼としたものではなく、ひろく、和文和歌の類をも掲載してはいるが、地方からの投書の類は、ほとんどの漢詩だけに限られている。それに、「柳北云」とか、

「末広鉄腸云」とかの見出しで短評を添えたものが掲載されている。その第四十六号の五枚目裏に載つてある一首を引用すると、以下の通りである。その「幽栖人」は、柳北のことを詠んだものである。

読花月新誌

鶴亭閑人曾我

一番読了<sup>ヲ</sup>一番新

月影花香仙万縞

無<sup>キ</sup>限風流誰是主

幽栖人占墨陀春

(高橋愛山云、頴妙)

要するにこの種の詩材にも、時代の新方向が視られるので、各冊の分量は二十ページ内外のものであるが、卷末に「定価一冊四錢、十冊前金三十六錢」云々の文句が出ていく。他の「新文詩」などに對抗し、大衆的に投書を重んじ、装幀も和紙の簡素なものとしているが、そこにも柳北の企画は出でている。片仮名交りの和文では「倫敦小誌 ヘンス」という探偵物の翻案めいたものなどもあり、興味中心の原稿も

少くないが、前掲した「航薇日記」は、花月新誌の明治十二年の八十三号から連載されたものであり、「航西日乘」の方は、その百十八号以降に掲載されている。文例として、航薇日記の序の一節を引いて見よう。

此日記は始めて、上國に遊びし時、旅のやどり／＼にて筆のまに／＼記るしたるものなり。其文章の拙きは、言ふ迄もなく、余が世を捨てし翌年の遊びなれば、自から放縱に流れ、人に語る可からざるほどの狂痴に類せし事ども多ければ、筐裏に打こめ置しを、此比取出でて見るに、既に十とせを過ぬれば、昔忍ぶの心やみ難く、世に恥かくことも忘れて、此誌にうつし入れぬ。看る人ゆるし給へや。

明治二年己巳の時雨月十二日の夕、余が墨陀の旧廬に寓する戸川成斎が、余が浅草森田街の草庵に来たりて、こたび、事有りて采邑なる備中の妹尾に赴くよしを告げ、余にも共にゆく可し、と勧む。さらでだに、京阪に一遊せんと思ふ折なれば、例の烟霞痼の動き出でゝ渴めがたければ、前の事皆擲ちて旅の装ひをなす事とはなりぬ。(以下省略)

これは柳北の三十三歳の時の文であり、特色という程のものも出ていないが、漢詩と同様に、周囲に対し見聞のままを自由に表現している。柳北の書遺した和文と云え、大半、紀行文であるが、進歩思想と反動思想との混然とした世相に対する觀察のほどが光っている。これは、また東京風俗と関西

風俗との差別とも見られよう。「航薇日記」の中、姫路に上陸したあたりの一項を掲げて見る。

飾磨の岸に舟よせて上陸す。この湊は姫路藩の所領にて民戸三千ばかりあり。魚市日に賑はしといふ古歌に、飾磨の市といふは是れなるか。此地にて髪を梳る市人々みな余が東京風の姿にてありき廻るを怪めり。こゝより姫路まで五十町余りなり。往きて見んと思ふに日傾きしかば、湊口の中熊といふ宿に就き一浴す。此湊に下等の娼妓數十名あり。停泊する舟子の為めに設くるならん。此家にも阿常・阿虎といふ二名あり。其さまを見るに、宛も蝦蟇の動き出でたる様に見えぬ。髪の結ひやうは浪華風にて櫛の厚くして大きくなるには驚きぬ。……

かれの遊蕩趣味の一面が些か覗われる。「東京風の姿」とあるのは、関西人がまだ髪をつけていたのに対し、柳北が斬髪していたのをいつたものである。政府が「斬髪令」を出したのは、その翌々年であつたが、数年はそれが履行されなかつた世相の事情を予兆している。明治二年における文学関係の史実としては、南部義寿の修国字論が出され、極端なローマ字採用論まで世に出て問題を生んでいる。柳北の態度は別にはつきり書き遺されたものはないが、時代過渡の荒波は、人を極端から極端へと追いやる。維新革命も、今日から回顧すると、ほぼ一世紀の昔とはなつていて、日本が再び、その改革にも準ずる転換期に直面していることに比較して、感

概無量のものがある。

柳北は、何といつても一人の文学者であつた。西行や芭蕉やの生涯に比較することは如何とも思うが、混沌とした状勢があまりにもありありとその眼底に映された。かれの鋭い理知が、ごうごうとした衆俗に伍することを許さなかつたのである。そこに、また知識人の悲しい運命があるとも云えるだろうが、尖刀を潜めるかかる型の人間も、後の社会は必ずしも見すてないであろう。結局、人間の知識は、その持主を苦惱の海に沈める以上の何ものでもないが、柳北型の人物においては、詩文が一握の砂であつてよいのである。絶対の隠逸、極度の悲劇、眞の「あはれ」「さび」「わび」からは、一言一句の詩さえも期待されないのが必至でなければならぬ。この際柳北はどの程度に、時世と人間との交渉関係を追求したかは明確でないが、つねに自らの良識に忠実であつたと考えられる点から、かれも祝福されてよい運命人の一人だと呼ぶたいと考へる。